PROGRAM [第130回 定期演奏会]

リゲティ:ルーマニア協奏曲(約15分)
György Ligeti: Romanian Concerto

第1楽章 アンダンティーノ *Andantino*
第2楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ *Allegro vivace*
第3楽章 アダージョ・マ・ノン・トロッポ *Adagio ma non troppo*
第4楽章 モルト・ヴィヴァーチェ - プレスト *Molto vivace - Presto*

バルトーク:ヴィオラ協奏曲 Sz.120, BB128 ※シェルイ補筆版 (約20分)★
Béla Bartók: Viola Concerto, Sz.120, BB128 (Serly version)

第1楽章 モデラート *Moderato*
第2楽章 アダージョ・レリジオーソ *Adagio religioso*
第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ *Allegro vivace*

── 休　憩 (20分) ── *Intermission*

ムソルグスキー(ラヴェル編曲):組曲「展覧会の絵」(約35分)
Modest Mussorgsky (arr. Maurice Ravel): Pictures at an Exhibition

プロムナードⅠ *Promenade*
Ⅰ.こびと *Gnomus*
プロムナードⅡ *Promenade*
Ⅱ.古城 Ⅱ *vecchio castello*
プロムナードⅢ *Promenade*
Ⅲ.テュイルリー *Tuileries*
Ⅳ.ビドロ *Bydlo*
プロムナードⅣ *Promenade*
Ⅴ.殻をつけた雛鳥の踊り *Ballet des poussins dans leurs coques*
Ⅵ.サミュエル・ゴールデンベルクとシュムイレ *Samuel Goldenberg und Schmuyle*
Ⅶ.リモージュ *Limoges – Le Marché*
Ⅷ.カタコンブ *Catacombæ (Sepulcrum Romanum)*
Ⅸ.鶏の足の上に立つ小屋(バーバ・ヤガーの小屋) *La Cabane sur des pattes de Poule (BABA-YAGA)*
Ⅹ.キエフの大門 *La grande porte de Kiev*

指揮:下野 竜也 *Tatsuya Shimono, Conductor*
ヴィオラ:川本 嘉子 *Yoshiko Kawamoto, Viola* (★演奏曲)
管弦楽:兵庫芸術文化センター管弦楽団 *Hyogo Performing Arts Center Orchestra*

2022 2/11(金・祝)・12(土)・13(日) 3:00PM開演
兵庫県立芸術文化センター KOBELCO大ホール

主催:兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

助成:文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業) 独立行政法人 日本芸術文化振興会

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。
※新型コロナウイルス感染症の水際対策に係る新たな措置により、当初予定のシルヴァン・カンブルラン及びティモシー・リダウトは来日が叶わず、指揮者とソリストが変更となっております。予めご了承いただきますようお願い申し上げます。

これさえ見ればわかる!

今回の聴きどころ

東条 碩夫 (音楽評論)

民族主義音楽からの飛翔

今日の主役は、それぞれ民族音楽をルーツに持った、東欧とロシアの作曲家たち。

最初は、ハンガリー出身で、のちオーストリアに亡命し、先鋭的作曲家に変貌していったリゲティ。彼がまだハンガリーにいた時代に書いた、民族色満載の曲「ルーマニア協奏曲」である。次は、同じくハンガリー出身のバルトーク。アメリカへ移住してから書いた生涯最後の作品「ヴィオラ協奏曲」。そして第2部では、ロシア国民主義音楽の巨頭ムソルグスキーの超名曲「展覧会の絵」── ただしこちらは、彼の素朴なピアノ曲を、フランスの巨匠ラヴェルがこの上なく豪壮華麗で洗練されたオーケストラ作品に編曲したものである。

形こそ違うものの、その底流には各国の民族色が、ある部分では明確に、また別の部分では秘かに波打っているのも楽しめよう。

ライターおすすめ!! 必聴POINT

リゲティ:ルーマニア協奏曲
「先鋭的現代作曲家リゲティも若い頃にはこんな作品を…」

第2楽章では突然ルーマニア民族舞曲的な陽気な音楽に。第4楽章ではヴァイオリン・ソロが大活躍、舞曲調の音楽がジョーク気味に躍動。風変りな終り方にも注目。

バルトーク:ヴィオラ協奏曲 Sz.120, BB.128 ※シェルイ補筆版
「バルトークの最後の作品」

切れ目なしに演奏される3楽章構成。渋いが、不思議な憂愁美が魅力。前半の陰翳豊かな曲想に対し、第3楽章では突然ハンガリー舞曲風の音楽に。ヴィオラの見事な歌と躍動。

ムソルグスキー(ラヴェル編曲):組曲「展覧会の絵」
「豪華絢爛、ラヴェル・サウンド」

ラヴェルの見事すぎるオーケストラ編曲は、原作者を霞ませるほど。トランペットの活躍が目覚ましい。終曲「キエフの大門」での豪壮な盛り上がりは圧巻。

〈第130回定期演奏会〉

Program Note

曲目解説「演奏をより深く楽しむために」
音楽評論：東条碩夫

リゲティ：ルーマニア協奏曲

初演：1951年　ブカレスト（非公開試演）

ハンガリー時代のリゲティを知るための貴重な作品

第2次世界大戦後、ハンガリーを含む「東側」諸国の音楽界は、スターリン主義の思想に支配され、調性を持った伝統的な作風が歓迎される一方、西側諸国の作曲界におけるような大胆で実験的な音楽は非難されていた。ハンガリー出身の作曲家リゲティも、1956年12月に「西側」へ亡命して以降でこそ、電子音楽をはじめ最先端の音楽を手がけたりして、やがて現代屈指の存在と称される存在となるのだが――それ以前のハンガリー在住時代の彼の作品となると、いささか趣を異にする。

リゲティは、1949年にブカレストでルーマニアの民族音楽を研究する機会を得たが、そこから生まれた作品が、1951年のこの「ルーマニア協奏曲（コンチェルト・ロマネスク）」なのであった。のちのリゲティの作風とは全く異なるそれを垣間見る点でも興味深いが、彼によれば「第4楽章でヘ長調の進行の中に嬰ヘ音が鳴る個所があるが、これ一つで作品の公開演奏が禁止される格好の材料となった」という(注1)。

第2楽章と第4楽章には、エネスクの「ルーマニア狂詩曲」でのそれを思わせる舞曲風の音楽が現れるが、後者では特に諧謔的な曲想が目立つ。彼のハンガリー時代の作品としては、おそらく唯一広く知られ、しかも人気のある曲であろう。

作曲家プロフィール

ジェルジュ・リゲティ
György Ligeti, 1923-2006

ハンガリーのトランシルヴァニア地方（現在はルーマニア）でユダヤ系ハンガリー人の家に生れ、ウィーンで他界した、20世紀後半における屈指の作曲家。今日その作品が演奏される機会の最も多い現代作曲家でもある。父と弟は第2次大戦中に強制収容所で命を落した。彼自身は1956年秋のハンガリーの民衆蜂起がソ連軍により無惨に鎮圧された後、12月にオーストリアに亡命、以降自由な音楽活動に入って多くの名作を残した。

楽器編成	フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、バスーン2、ホルン3、トランペット2、大太鼓、サスペンド・シンバル、クラッシュ・シンバル、スネア・ドラム、弦楽5部

バルトーク：ヴィオラ協奏曲 Sz.120, BB.128 ※シェルイ補筆版

初演：1949年12月2日　ミネアポリス

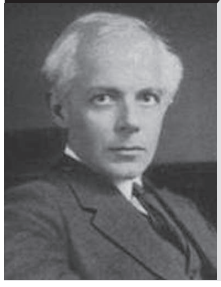
未完の作品、シェルイ（シェルリー）が草稿から補筆完成

20世紀前半に登場した「3大作曲家」は、ストラヴィンスキー、シェーンベルク、バルトークである――と言われる。もちろんこれは「ある面での見方」によったものだから、異存や食い違いが生じるのは致し方ない。ただ、この3人がいずれも、「強烈な個性を持ち、重要な新生面を開いた」(注2)人々であったことは疑いのないところであろう。

バルトークは、若い頃に没頭したハンガリーの民俗音楽から自身の音楽へのインスピレーションを得たが、やがてそこから大きく飛翔し、所謂「国民楽派」を超えた巨大な存在に変貌していった。だが、そのいずれの作品にも、故郷ハンガリー（マジャール）の音楽の特質が、明確に、あるいは脈々と流れ続けている。第2次世界大戦中の1940年、ハンガリーの政治体制を嫌ってアメリカ合衆国に移住してからの作品には、往年の先鋭的な作風は既に聴かれなくなっていたが、彼が草稿のみを残して世を去ったこの「ヴィオラ協奏曲」には、故郷からのエコーがまだ生き続けている。

なおこの草稿を基に全曲を補筆完成したのは、バルトークを敬愛してその仕事を手伝っていたハンガリー出身の作曲家・ヴァイオリニストのティボール・シェルイ（1901～1978）であった。初演は、同じくソロ・パートに手を加えた有名な奏者ウィリ

作曲家プロフィール



ベーラ・バルトーク
Béla Bartók, 1881-1945

ハンガリーのナジセントミクローシュ（現在はルーマニア）に生れ、ニューヨークで他界したハンガリー最大の作曲家。ピアニストとしても卓越し、パリのルビンシテイン・コンクールでバックハウスに次ぎ2位になったこともある。野性主義的な作風時代の「中国の不思議な役人」、円熟期の「弦・打・チェレスタのための音楽」をはじめ、ハンガリーの民族音楽の精神に基づいた世界的な規模の名作を数多く発表した。

アム・プリムローズと、アンタル・ドラティ指揮ミネアポリス響により行われた。

楽器編成	独奏ヴィオラ、フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン3、トランペット3、トロンボーン2、テューバ、ティンパニ、大太鼓、スネア・ドラム、シンバル、弦楽5部

ムソルグスキー（ラヴェル編曲）：組曲「展覧会の絵」

編曲版初演：1922年10月19日　パリ

親友の遺作展から生まれた名曲

「ロシア音楽史上、ムソルグスキーほど、ロシア民族とその代表的な形象を、的確に、しかも正しく描き上げた作曲家を見出すことは難しい」と言われる（注3）。またムソルグスキー自身も「生活を、真実を、大胆に心を込めて人々に率直に語ること、これが私の気風である」と語っていたという（注4）。彼の作品に満ちる民族色豊かな、かつ生々しく、荒々しいまでの率直な迫力は、それを如実に物語るだろう。本来はピアノ・ソロのために書かれたこの組曲「展覧会の絵」も、その一例である。

1873年8月、作曲者との親交のあった建築家ヴィクトル・ガルトマンが他界したが、その設計図やスケッチ、デザインなどを集めた遺作展が、翌年春にペテルブルクで開催された。ムソルグスキーは、その「展覧会」を見た印象をもとに、この10曲からなる組曲を書き上げた。ただ、現在では、この「10枚の画」のうち、素材となったものが明確に判明しているものは、4点程度に過ぎないとされている。

作曲者の没後、友人リムスキー＝コルサコフの努力により、1886年に楽譜が出版された（但し楽譜には彼の手が多少加えられていた）。この全曲譜をもとに大管弦楽のための編曲版を書いたのが、フランスのモーリス・ラヴェル（1875〜1937）である。彼は1922年、折しもパリに亡命していたロシア出身の指揮者クーセヴィツキー（のちボストン響音楽監督）の委嘱を受け、短期間のうちに書き上げたのであった。ムソルグスキーのピアノ用原典版も当時としてはかなり大胆奔放で先鋭的なものだったが、このラヴェルの編曲版は、「オーケストラの魔術師」と異名を取った彼の手によるものだけに、実に絢爛豪華な、色彩感豊かなものである。もっとも、それはあくまで20世紀のフランスの洗練された感覚にあふれた編曲であって、19世紀の素朴なロシアの民族色を持った原曲とは全く異質の性格というべきであろう。

因みにこのラヴェル以外にも、この作品の編曲を試みた作曲家は、ジャズやシンセサイザーの分野まで、数え切れぬほど多数に上っている。それほど人気のある作品なのである。

10点の絵を基に作曲者が拡げる自由奔放な幻想

曲冒頭にトランペットで奏される主題は「プロムナード」（散歩、散歩道）。絵から絵へ歩みを移す鑑賞者の心情をも表わし、この後も折に触れ繰り返される。

Ⅰ**「こびと」** 地底の宝を守る妖精。

Ⅱ**「古城」** 中世の古い城に寄せる懐旧の歌。

Ⅲ**「テュイルリー」** パリの公園。

Ⅳ**「ビドロ」** 牛。農民の悲惨な姿を暗示するとも言われる。

Ⅴ**「殻をつけた雛鳥の踊り」** バレエの衣装のデザイン画が現存する。

Ⅵ**「サミュエル・ゴールデンベルクとシュムイレ」**
横柄な男と卑屈な男の対話の光景。トランペット・ソロが妙技を聞かせる。

Ⅶ**「リモージュ」** フランスの町の広場で賑やかにお喋りする女性たち。

Ⅷ**「カタコンブ」** ローマ時代の古代キリスト教徒の墓の光景。

Ⅸ**「鶏の足の上に立つ小屋（バーバ・ヤガーの小屋）」**
現存する絵では時計のデザイン。作曲者はスラヴの伝説に登場する妖婆バーバ・ヤガーが狂暴に乱舞する光景にイメージを拡げた。

Ⅹ**「キエフの大門」**
ウクライナの首都キエフに建つ大門のデザイン画による。ラヴェルの管弦楽法の豪壮華麗な色彩感が存分に発揮されたクライマックス。

楽器編成	フルート3（ピッコロ持替2）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、バス・クラリネット、アルト・サックス、バスーン2、コントラ・バスーン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン2、バス・トロンボーン、テナー・テューバ、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、スネア・ドラム、グロッケン、シロフォン、タムタム、鐘、トライアングル、ラチェット、鞭、ハープ2、チェレスタ、弦楽5部

（注1）リゲティ作品集CD（ワーナーWPCS-11281）解説冊子から自由に引用
（注2）「大作曲家の生涯」（ショーンバーグ著、亀井旭他訳、共同通信社刊）
（注3・注4）「ロシア音楽史」（森田稔・梅津紀雄訳、全音楽譜出版社刊）

作曲家プロフィール

モデスト・ムソルグスキー

Modest Mussorgsky, 1839-1881

ロシアのプスコフに生れ、ペテルブルクで他界。リムスキー＝コルサコフやボロディンらの所謂「ロシア5人組」（ロシアでの呼称は「力強い5人」）の中で最も優れた才能を持った作曲家と評される。「ボリス・ゴドゥノフ」はオペラ史上屈指の名作である。近衛士官学校卒で、若い頃は洗練されたマナーを持つ社交的な青年であったが、やがて酒におぼれ、荒れた生活の中に、42歳という若さで世を去った。